

# 和文・英文要旨

# 論文の和文要旨

論文題目            フランス語の非動詞文研究

氏        名            川島浩一郎

現代フランス語において、動詞を述辞としない発話が、(1)や(2)のように独立文となることがある。これらを非動詞文と総称する。

(1) *C'est moins dur. - L'aube, maintenant.*

(2) *J'ai envie de me coucher tôt ce soir. Charmante, ta soirée, Becket!*

動詞文の文としてのステイタスは、動詞そのものの独立的な性質によって保証される。本論文では、非動詞文が独立したステイタスを獲得しうる要因を、主に統辞的な観点から分析した。また、専門的な研究が殆どないこのタイプの文に、詳細な記述を与えた。

第1章では、アメリカ構造主義言語学が用いた内心構造・外心構造という概念を定義し直した。本論文では、内心構造を、一まとまりで統辞機能を担うような連辞と定義する。それに対して、外心構造は、一まとまりで統辞機能を担わないような連辞である。例えば"*cette jeune fille*"は動詞の目的辞や主辞などとして機能しうるので内心構造である。"*je marche*"は文の核であり明確な統辞機能は認められない。従って外心構造である。一般に統辞機能を持

つことは、従属的であることを含意する。前者が従属的な、後者が独立的な性格を持つのはこのためである。

第2章から第10章では、述辞となっている記号素ごとに非動詞文を分類して記述した。主に独立性と内心構造・外心構造との関連を分析し、非動詞文の全体像を示した。"merci"のような間投詞や、"oui"のような発話は、動詞と同じく記号素そのものの性質に独立性が含意されている。その他の非動詞要素の独立性は、基本的に高くない。しかし観察の結果、全体が外心構造である場合、内心構造である場合よりも独立性が高い傾向があることが分かった。

上の(1)や(2)は外心構造であることで独立性を獲得する。例えば"ta soirée charmante"ならば内心構造であるが、(2)の"charmante, ta soirée"全体は一まとまりの統辞機能を持たない。その結果、明確な統辞機能を持たない文の核としてのステイタスを持つことになる。

(3) *Sale temps pour mourir!*

名詞を述辞とする文において、(3)のように名詞が冠詞類などの限定を受けていない(無限定辞名詞)ことがしばしば観察される。他方、動詞文中での無限定辞名詞句は、機能辞によって自律化されているか、述辞であるか、述辞の一部であるか、等位されていることがほとんどである。つまり明確な統辞機能を担わないような位置に現れる傾向がある。非動詞文の述辞としての名詞に限定辞がつかないことが相対的に多いのも、これと同じ傾向である。この意味で無限定辞名詞句は外心構造的な性格と関連しうるものを持っていると考えられる。

(4) 38. *C'est pas grave. Une aspirine et ça passera.*

(5) *Vous avez bien dormi? Et toi, mon tout petit?*

(4)の"une aspirine"は動詞文"ça passera"に等位接続されることで、いわば文のステイタスに擬似的に昇格されている。一般に等位接続は異質なものでも、あたかも等質であるかのように結びつけることが可能である。また"une aspirine et"は等位関係の一部分に過ぎず、(5)の"et toi"などと同様に明確な統辞機能はもたない外心構造である。

(6) *Ce n'est rien. Pas de panique...!*

"pas de N"という連辞は"il y a"や"avoir"のような比較的意味の希薄な動詞要素と結びつく頻度が高く、従って意味的な独立性が高い。(6)の独立性が高いのは、このことと関連すると推測できる。またこの連辞は(7)と同様に、外心構造である。

(7) - *Qu'est-ce qui a créé la musique?*

- *Probablement pas les mathématiques.*

名詞が述辞でない限り、否定の"pas"や"plus"は動詞や形容詞を限定することが多い。従って、これらの限定を受けた名詞句はまとまった統辞機能は担いにくい。

上記以外でも、外心構造は(8)のように様々な方法で作ることができる。

(8) *Il commanda une bière, moi un crème.*

非動詞文の独立性には外心構造が大きく関与している。外心構造は明確な統辞機能を持たないという、いわば否定的な側面を利用して独立性を高めていると言える。

第11章から第20章では、動詞・名詞の対立、能格構造との異同など、非動詞文が提起する問題点を個別的に論じた。また、これらの問題点が、内心構造・外心構造とも関連していることを示した。

第12章では、不定詞を述辞とする非動詞文を分析した。独立的な動詞と従属的な不定詞との対比は、非動詞文の問題点を反映している。不定詞は統辞的に主辞をとらない。これはほとんどの動詞文が主辞を要求するという事実とも相まって、不定詞の従属性と表裏一体の関係にある。動詞文は主辞を要求し外心構造をつくる。それに対して主辞をとらない不定詞は基本的に内心構造的であり、従属性が強い。

動詞命令文が条件・譲歩節に対応する現象を虚構の命令法と呼ぶ。第13章では、特に並置によるこの用法を、動詞文が文としての独立性を弱化させる現象として位置づけた。すなわち、外心構造が内心構造的に働く。このように、独立性と従属性の問題は動詞文にも関係する。独立性の弱化は、他の文への従属化である。この点で虚構の命令法は、多くの非動詞文に見られる従属要素が独立性を高める現象とは逆の方向性を示している。

(9) *avec des amies, nous sommes allées voir [...]*

前置詞*avec*が導く項が、主辞と内容的に重複する現象がある。例えば(9)で、*nous*が指示しているのが文意上「友人たちと私」であることがある。第14章ではこのような現象を、ある項が「主辞+述辞」の外側に取り出される現象として記述した。つまり、*Pierre et Marie se disputent*から*Marie*を取り出したものが*Pierre se dispute avec Marie*であるとし、(9)もこれと類似の現象であると平行的に解釈する。すなわち、外心構造(主辞+述辞)内部の一要素が内心構造を作る従属的な要素(*avec N*)となる。このように、従属的な位置と独立的な位置との相関関係が、動詞文の内部に存在することを示した。

第15章では上の(3)のような非動詞文を詳細に分析した。

第16章では(4)のような構文を、動詞文の周囲で非動詞的要素がどのような統辞行動をとるかというより広い現象群の中に位置づけた。

(10) *Il y eut un zig-zag, une explosion, des flammes.*

第17章では、(10)のような過程(*procès*)を表す*IL Y A*構文と能格構造とを比較し、両者の異同を論じた。*IL Y A*構文は事態をそのまま提示し、義務的な参加項を要求しない。つまり述辞と参加項との統辞関係は内心構造である。*IL Y A*構文は「自動・他動」の区別も曖昧である。能格構造と決定的に異なるのは、動作主を明示するための積極的な標識を欠くことと、二つ以上の参加項をとることが稀なことである。述辞が受ける限定は、その解釈が全面的

に状況・文脈・語彙に依存した曖昧な関係である。IL Y A構文においては動作主や主体は積極的に表示する必要がむしろないのであり、「動作主-過程-被動作主」のような明示的な関係の消去というのが、おそらくはこの種の表現の狙いだと考えられる。

(11) A 6 heures, il partit. Le lendemain, il arriva à 4 heures et s'en alla à 6 heures. Le surlendemain, arrivée à 4 heures, départ à 6 heures.

第18章では(11)のような過程を表す非動詞文を記述した。このタイプの非動詞文には第17章で記述したIL Y A構文と平行的な部分もあるが、同一ではないということを示した。"il y a"の機能についても考察した。過程の表現には少なくとも二通りの方法がある。一つは動詞を述辞とするやり方で、頻度が高い。もう一つは名詞などの非動詞要素を述辞とする方法で、動詞文と比べれば頻度はずっと低い。この頻度差は、動詞が述辞に特化した記号素であるのに対して、名詞などがそうではないという事実と符合する。このことは動詞と名詞との機能的な区別の問題に繋がっていると考えられる。

非動詞文はしばしば情意的な発話であると言われる。第19章では"mais oui"や"mais non"という強調表現を分析することで、言語構造と情意的な発話現象との関係に言及した。まずoui, si, nonは従属節中にも現れうるという点で間投詞から区別する。そしてmaisとoui, si, nonにそれぞれ知的な用法と情意的な用法という両極がありうることを確認し、以下のように推論した。oui, si, nonへのmaisの付加は、知的な用法のoui, si, nonにいわば間投詞的な性格を与え、情意的側面を強調する。Je crois que oui に対し\*Je crois que mais oui が不可であるように、mais ouiの統辞行動は間投詞に類似している。

第20章では(6)のような構文を記述した。この構文は主に「不在」と「禁止」の二つの用法を持つ。この用法の相違は主として文脈・状況に依っているが、語彙的な傾向も関係している。「不在」よりも「禁止」のほうに制約が多い。

Pas de N構文の成立要因としては、動詞限定の"pas"と"de N"とが結びつきを強めたことや(従ってもともとは外心構造), "pas de N"が"il y a"や"avoir"という意味特性の比較的希薄な構文と共起する頻度が高いことがあげられる。